6/23/2009

# ＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊

S.　Ashina

オリエンテーション
序論　宗教と社会・政治・民族
Ⅰ　「政治的なもの」とキリスト教
Ⅱ　キリスト教思想と経済
　１　聖書の宗教と経済
　２　キリスト教と資本主義　6/23
　３　経済の神学と公共性　6/30
　４　経済と環境、あるいは政治の復権　7/7
Exkurs　キリスト教から見た東アジアの多様性―家族・死者儀礼―
Ⅲ　東アジアの近代化とキリスト教思想　10/6 ～

＜前回＞

## １　聖書の宗教と経済

### （１）宗教と経済、問いの所在

１．ロゴス化以前の生の運動、欲望の次元から
　　↓
　これは、宗教と経済の本質的な接点でもある。宗教経済学
３．宗教と経済は、宗教思想にとって、いわば隠れた問いである。
　聖と俗の二分法：宗教と経済を分離する暗黙の思考法
　現実の宗教を批判的に分析する際に、この二分法には、限界がある。
　　↓
　経済・富・欲望は、キリスト教にとって、常に隠れた争点として存在した。
　この経済と宗教とのリンクにこそ、宗教の根本的問いがある。
　　聖書の富者批判、愛の共産制、修道制の成立と展開、宗教改革、土着化など
　「貧しさ」：宗教的あるいは経済的？　アッシジのフランチェスコ
　　心の貧しさと端的な貧しさ

### （２）聖書の宗教と経済

４．トレルチの『社会教説』
５．キリスト教は日常性（経済）と超越するだけでなく、日常性に内在する。
６．古代イスラエル経済＝遊牧という図式とその限界

### （３）聖書が描く日常性の多様性

７．聖書から特定の政治システムを一義的に導出できない。経済・富の問題も同様である。
10.「聖書における富の問題に関して、まず確認すべき点は、聖書には富に対する統一見解など存在しないということである。旧約聖書においては、一方に、富を神からの祝福とする考えがあり――知恵文学には、不正な富の獲得は別にして、富自体を肯定的に捉える言葉が散見される――、他方、預言書や黙示文学では、貧富の格差や不正との関連における富あるいは富者への強烈の批判が見られる。新約聖書においても、旧約聖書の富者批判

を受け継いだ議論（福音書、ヤコブ書、ヨハネ黙示録）から、富自体よりも富に固執する欲望へと批判の論点を移す議論（パウロ書簡、牧会書簡）まで、様々な見解が存在する。］

11．問題

・聖書解釈から何が言えるか　　・「経済―政治―社会」の相互連関の理論モデル

・近代の問題状況の明確化

## ２　キリスト教と資本主義

問題：富者批判の宗教と資本主義とは両立するか？　キリスト教は近代と調和できるか？

そもそも、キリスト教にとって近代とは、近代にとってキリスト教とは、何だったのか？　→　**「近代／ポスト近代とキリスト教」研究会**

### （１）近代と社会化の問題

１．アーレントの近代論

古代ポリス→公共性・政治と私的領域（生命維持の労働、家族、経済）

言論と行為(common/open)

古代についてであっても、これでよいのか？

公的領域の特性を明確化するためのモデルでは？

経済は本質的にグローバル化の傾向を有する

欲望と外的環境への適応

２．近代＝社会化

アーレントにおける否定的な見方。全体主義の起源という問題意識のため。

近代の特徴としての「社会的なもの」の登場・拡張

↓

公私二元論の意義と限界（抽象性）

３．Hannah Arendt, *The Human Condition*, 2nd edition, The University of Chicago Press, 1958.

The emergence of society --- the rise of housekeeping, its activities, problems and organizational devices --- from the shadowy interior of the household into the light of the public sphere, has not only blurred the old borderline between private and political, it has also changed almost beyond recognition the meaning of the two terms and their significance for the life of the individual and the citizen.（38）

The rebellious reaction against society during which Rousseau and the Romanticists discovered intimacy was directed first of all against the leveling demands of the social, against what we would call today the conformism inherent in every society.

they are members of one enormous family which has only one opinion and one interest.（39）

The phenomenon of conformism is characteristic of the last stage of this modern development.

bureaucracy（the last stage of government in the nation-state just as one-man rule in benevolent despotism and absolutism was its first）

all of which trend to "normalize" its members,（40）

The rise of mass society

the victory of equality in the modern world is only the political and legal recognition of the fact

that society has conquered the public realm, and that distinction and difference have become private matters of the individual.（41）

that lies at the root of the modern science of economics,

only when men had become social beings and unanimously followed certain patterns of behavior, so that those who did not keep the rules could be considered to be asocial or abnormal.（42）

The unfortunate truth about behaviorism and the validity of its "laws"

The uniform behavior that lends itself to statistical determination, and therefore to scientifically correct prediction,（43）

"socialization of man"

４．キルケゴール以来の「近代大衆社会批判」というステレオタイプ

**（２）近代社会における「経済」の位置**

**＜文献＞**

・小笠原真『二十世紀の宗教社会学』世界思想社。
・中久郎編『現代社会学の諸理論』世界思想社。
・今田高俊『自己組織性――社会理論の復活』創文社。
・ニクラス・ルーマン『宗教社会学――宗教の機能』新泉社。
『宗教論――現代社会における宗教の可能性』法政大学出版会。
・飯田剛史『在日コリンアの宗教と祭り――民族と宗教の社会学』世界思想社。

５．パーソンズとルーマン

機能システム分化と近代社会の成立

社会変動（出来事としての状況変化）から

意味論的変動（新しい観察図式の形成）へ

制度的再帰性

６．パーソンズ：社会は諸要素からなる一定の均衡と自律性をもつシステムである。

↓

中期パーソンズ（『社会体系論』1951年など）

行為理論：社会体系の理論／パーソナリティ体系の理論／文化体系の理論（理念としての文化）

構造―機能分析、四機能分析（ＡＧＩＬ分析）

システム構造の維持・均衡のための諸機能

Adaptation（適応）：システムの外部環境への適応＝経済活動の領域

Goal Attainment（目的達成）：

集団が共通の目的を形成し達成しようとする機能＝政治的活動の領域

Integration（結合）：メンバーを相互に結合し規範的統制をはかる機能＝組織・ネットワークの領域（慣習・道徳・法）

Latent Pattern Maintenance（潜在的パターンの維持）：メンバーの内面における文化・価値・アイデンティティを形成し保持する機能

宗教は特定の下位体系に所属するものではなく、各々の体系において機能する。

↓

７．ルーマンの機能―構造分析、自己組織化のシステム論（→ティリッヒ、アガンベン）

**（３）資本主義と宗教―アダム・スミスの場合―**

**＜文献＞**

・田中秀夫著『スコットランド啓蒙思想史研究――文明社会と国政』名古屋大学出版会。
・大河内一男『アダム・スミス』講談社。
・田中正司編『スコットランド啓蒙思想研究――スミス経済学の視界』北樹出版。
・田中正司『市民社会理論の原型――ジョン・ロック論考』御茶の水書房。
・田中正司『アダム・スミスの自然神学――啓蒙の社会科学の形成母体』御茶の水書房。

１．経済の深みとしての宗教
　　人間理解が両者の接点
２．ウェーバー・テーゼ：キリスト教と近代資本主義の逆説的関係
　「プロテスタントの職業観→カルヴィニズムの禁欲的エートス→資本主義の精神→
　　資本主義の経済システム」（ 心理的効果とエートスの形成）
　　芦名定道「富・貧・欲望――思想」、芦名・土井・辻『［改訂版］現代を生きるキリスト教』教文館、174-180頁。
　　梅津順一　『近代経済人の宗教的根源』みすず書房。
３．アダム・スミスの場合
　・スコットランド啓蒙、カルヴィニズムと啓蒙
　・道徳論と経済論：『道徳感情論』→『国富論』
　・自然神学（グラスゴウ大学でのスミスの「自然神学」講義）
　　自然：人間存在の共通構造（公共性の基盤）
　　近代人：私利を求めて合理的に行動する
　　ここから、社会秩序がいかに生成するのかという問題
　　→　市場の自律性、リバタリアニズム
　　→　あるいは他律、政治のコントロール、社会主義
４．田中正司『アダム・スミスの自然神学――啓蒙の社会科学の形成母体』御茶の水書房。

| ①デザイン・目的因・必然 | ⟶ | 作用因・自由 |
|---|---|---|
| 神（不可視） | 自然の狡知 | 人間（自然的感性・情念） |
| ↓ | みえない手 | ↓ |
| ②正義と仁愛 | | ③利己心、もろさ、共感 |
| 贖罪 | | 道徳、地上の正義 |

５．アウトライン
「神の存在証明と神の属性の解明のために人間精神の諸原理を探求することを通して、法学の神学的基礎を明らかにすることを主題としていた自然神学の伝統」（160）
「情念の運動を人間の自然の構造に基づくものと考えていた」（160）
「人間本性の「自然の構造」分析を「道徳哲学」の主題とし、道徳感情そのものを人間の情念の「自然の構造」分析を通して導いていたのである」（160）

「「自然の構造」分析が同感感情の心理分析に基づいて行われている点」（161）
「スミスは、「富と徳性」の合致の可能性を「自然の狡知」（工夫・計略）という神学思想によって説明していた」（161）
６．思想的背景（文脈）
「一八世紀初頭のスコットランドは、厳格なカルヴァン主義長老派の支配下にあったが、カルヴァンやノックスその他の改革者たちの思想的支柱をなしていたアウグスティヌス神学は、「原罪と人間の生来的腐敗」と強調するペシミズムに立脚していたのであった」、「予定説の信仰」（199）
「恐るべき不合理な教理」（200）
「教会内の穏健派知識人たちが、「科学こそ熱狂と迷信の偉大な解毒剤である」との「啓蒙の精神」に基づいて、非合理的な宗教を批判し、自然科学を「自らの受容しうる信条の模範とする」ことによって、宗教そのものを世俗化しようとしたのもそのためであるが、彼らがその最大の武器としたのが「自然神学」であった」、「宗教そのものを科学的精神に基づいて自然的にとらえ直すこと」（227）
７．①
「「神の永遠の正義」の支配を承認しながら、それがはっきり認知しえないのは、分かってしまうと人間は何もしなくなってしまうので、人間が身近な「出来事に精を出す」ように仕向けるため、曖昧に隠されているのである」（164）
「人間が自然の必然法則の支配下にありながら、それが隠されていて見えないため、自然にだまされて「彼の力の弱さの理解力の狭隘さにはるかに適合した大変つまらない部門の仕事しての彼自身の幸福と家族と友人と祖国のそれの配慮」に専念することが、「自然自身が従う規則」とともに、神の摂理実現という「同一の偉大な目的増進」につながると考えていたことを示す」（164）
８．「スミスの神観念」
「「自然の不可変の諸法則」の存在を認め、自然の必然法則の支配を承認していたこと」「その創造主としての「神の英知と善性」を認め」「神の「普遍的仁愛」を肯定していた」「仁愛的な性格とカルヴァン的なきびしさを合わせもつ「神の法」・「神の正義」の支配」、「地上の不義に対しては「神の正義」を期待するのが人間である」、「地上における神の代理人（vicegerent）」（165）
「「失意と苦難のもとにおかれた人間の唯一の効果的な慰めは、さらに一層高い裁判所……すべてを見ているこの世界の裁判官のそれへの控訴のうちにある」」
９．地上の正義、共感
「倫理と法の根本大前提としての神法の支配ないし神の正義を論理の前提化することによって、「神の正義」とは異なる地上の正義を確立する」（166）
「神の摂理の有効化因として、自らの自然の感情のままに「自然の性向」に従って行動する人間が、立場を交換して「観察者」視点に立つところに成立するこの世の正義の確立」（167）
「何かの形で他人の権利を侵害した場合には、仲間の是認なしには「孤独の恐怖」に耐ええない人間の同感感情の自然的帰結として、自分自身が「処罰に値する」との「ill desert の意識、merted punishment の恐怖」その他の「道徳的感情」を自然に抱くに至る、人間が

守るべき地上の正義の確立」（169）
10．自然的感情・内なる人
「人間の自然の感覚ないし「自然的感情」（natural feeling）としてのわれわれの道徳能力の活動を人―人間の感情的交流・交通原理としての同感に求め、その上に全体系を展開した」、「コミュニケーション原理としての「同感」概念の成立」、「スミスはこうした交通概念としての「同感と利己心」とに従って動く作用因主体（目的因の有効化因）としてとらえるこによって、その活動が自然に目的実現につながるとしていたのである」、「他人との感情的交流なしには生きられない人間の同感感情の自然の働きの結果」（169）
「悔恨の感情」「それ相応の処罰への恐怖」、「道徳的欺瞞理論と同様な原理に立脚する自然主義的な道徳感情論」（170）
「経験原理に立脚する倫理学」、「ありのままの「自然の性向」に基づいて行動する人間の自己偏愛性を前提しながら、そうしたパーシャルな「自然の感情」に動かされる人間が従うべき倫理の確立を主題とし、その原理を「公平な観察者」の同感に求めた」（171）
11．内なる人・良心、贖罪
「想像上の立場の交換に基づく「観察者」の立場の担い手を「内なる人」として内面・主体化（一人称化）している」
「スミスは、神の設計した作用（手段）⇨目的の自然法則の貫徹を形而上学的に確信しながらも、人間がそうした神のデザイン（目的・必然法則）の期成因（作用因）としての役割を完遂するためには、地上の倫理の確立が必要であると考えたため、「地上における神の代理人」に指定された人間のあるべき姿としての「内なる人」にその自覚的・あるべき対自的表現をみていたのである」
「良心論は、文字通りの神の計画と体系を前提とするものであった」（172）
「神の怒りが人間のような「いやしい虫けら」に落ちない理由をみることはでいない。それでも幸福でありたいと願うとしたら、彼はそれを「神の正義」にではなく「神の恩恵」に懇願する他はない。「悔恨」は、そのような人間にふさわしい感情であるが、彼はその有効性にさえ不信を抱き、英知的な神でさえ、弱い人間と同様、罪を許すことはないのではないかと恐れる。神の正義が人間の犯すさまざまな罪と両立しうるようになるためには、何らかの「贖罪」（atonement）が彼のためになされなばならない」（192）
12．コミュニケーション的倫理とその超越的根拠
「状況に即した正義が文字通り地上の正義にすぎないこと」「人―人関係倫理の客観性は、そのときどきの状況における人間相互間の地上の交通関係の規制原理としての妥当性に基づく相対的なものにすぎず、そのときどの状況を超える普遍性をもつものではない。そのならず、こうした地上の正義の判断主体である「現実の観察者」の同感は、こうした状況に即した適宜性すらもたず、当事者の状況的適宜性判断と対立する場合がある。その典型が、世論と良心とが対立する場合である」、「当事者は「想像上の（内なる）公平な観察者」に訴える他ないが、そのとき「内なる観察者」としての良心の支えになるのは、人―人関係や個別の状況を超えた原理（効用か神の権威）しかない」、「良心の支柱としての「神の正義」」（197）
「神の正義の存在を前提するものとして、地上の正義の原理としての「公平な観察者の同感」（世論）を超える原理を最初から内蔵していたのである」（198）

13. 自然本性とみえない手
「自由の感覚に基づいて行動する作用因としての人間のありのままの自然の感情がそのまま承認されることになる」、「ありのままの〝人間の自然〟（本性）をそれとして肯定する社会倫理を構想した所以」、「スミスの経験主義」、「作用因としての人間の自由に基づく手段の適合性追求活動が、おのずから摂理の意図する目的＝自然の必然法則を実現するなら、すべてを〝自然にまかせる〟のが良いことになる」(214)
「〝みえない手〟とは、人間にはみえないが、万物を支配している作用⇨目的の論理に媒介された自然の必然法則＝その起動因ないし設計者としての神の目的のことである」、「作用⇨目的の必然法則がみえないままに、手段の適合性を追求する作用因主体としての人間の行為の経験的観察と分析を通して、自由＝作用⇨目的＝必然実現につながる人間界の「みえない結合連鎖」（人間界の自然法）の解明を『感情論』の主題としたのである」(215)
14. 欠陥・弱さを含む神のデザイン
「「このような乖離の可能性も、神の計画の一部であり」」(211)
「キリスト教の正統的な信仰を多くの人間にみられる人間本性の事実として前提した議論を展開することとなったため、さまざまな罪をおかす人間の「弱さと不完全」と神の仁愛（贖罪）をアプリオリに前提した議論を展開することになったのである」(221)
「人間の欠陥をデザインの一部とする神義論」(222)
cf. マクグラスの啓蒙的な自然神学批判
自然における悪・反秩序を扱い得ない。
15.『国富論』とみえない手・市場原理
「『国富論』で、各人の自由な利己心追求活動がその意図しない帰結として社会全体の富の極大化とその適正配分につながる経済世界の自然法則を明らかにする一方、そうした自由（作用）⇨必然（目的）の自然法則の貫徹・実現を妨げる重商主義政策や、それと結びついた特権や独占を批判した根拠はそこにある」(266)
「偶然・自由の感覚に基づく自由な作用因としての活動が、人為的な政策介入や独占や特権がない限り、おのずから目的＝自然の必然法則（神のデザイン）を表現する」(267)
「経済社会における作用⇨目的のデザインを論証する経済理論体系の成熟と、それに対応する現実認識の進展に伴って、『感情論』の論理の根幹をなしていた作用（作用）⇨目的（必然）の論理の根幹をなす目的因仮説をひっこめ、作用因としての人間の構成する経済過程そそれ自体としての経験的分析・叙述に専念することになったのである。みえない手が、『国富論』では神秘性を感じさせず、文字通り比喩的表現に転化している理由はそこにある」(267)
「みえない手の摂理の現実化機構としての市場の意義」、「その実現を妨げる人為的政策や独占・特権等の歴史的現状批判」(268)

**＜聖書＞　神と人間の関係性**

**１．第２コリント**

4:6 「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。7 ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、

わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。
6:1　わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。

2Co 4:7

Ἔχομεν δὲ τὸν θησαυρὸν τοῦτον ἐν ὀστρακίνοις σκεύεσιν, ἵνα ἡ ὑπερβολὴ τῆς δυνάμεως ᾖ τοῦ θεοῦ καὶ μὴ ἐξ ἡμῶν

2Co 6:1

Συνεργοῦντες δὲ καὶ παρακαλοῦμεν μὴ εἰς κενὸν τὴν χάριν τοῦ θεοῦ δέξασθαι ὑμᾶς

２．ローマ

8:28　神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。29　神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。30　神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。

Rom 8:28-30

οἴδαμεν δὲ ὅτι τοῖς ἀγαπῶσιν τὸν θεὸν πάντα συνεργεῖ εἰς ἀγαθόν, τοῖς κατὰ πρόθεσιν κλητοῖς οὖσιν.

ὅτι οὓς προέγνω, καὶ προώρισεν συμμόρφους τῆς εἰκόνος τοῦ υἱοῦ αὐτοῦ, εἰς τὸ εἶναι αὐτὸν πρωτότοκον ἐν πολλοῖς ἀδελφοῖς

οὓς δὲ προώρισεν, τούτους καὶ ἐκάλεσεν　καὶ οὓς ἐκάλεσεν, τούτους καὶ ἐδικαίωσεν　οὓς δὲ ἐδικαίωσεν, τούτους καὶ ἐδόξασεν.

３．箴言

16:9 人間の心は自分の道を計画する。主が一歩一歩を備えてくださる。

Pro 16:9　לֵב אָדָם יְחַשֵּׁב דַּרְכּוֹ וַיהוָה

יָכִין צַעֲדוֹ